おかたらいてうの会ニュース

発　行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

らいてう没後50年・『青鞜』創刊１１０周年
今、生かそう　そのこころざし

昨年５月の総会以来、平塚らいてうの会も「コロナ」の影響を受け続けた１年でした。菅内閣へと政権が替わっても、コロナ禍への無策、国民のいのちとくらしに目もくれないその本質は「アベ政治」と変わりません。

森発言に「黙らない」女性たち

そこへ森喜朗オリ・パラ組織委員会会長の「女はわきまえて黙っていろ」発言です。１００年以上前の『青鞜』の時代に逆戻りしたような女性差別発言！しかし、その後の展開は違いました。ネット署名が15万を超えるなど、もう「わきまえない」「黙らない」「許さない」という声の広がりは同氏を辞任に追い込み、時代の変化を実感させました。「民主主義の危機」「黙っているわけにはいかない」とアピールした会の抗議声明には、信濃毎日新聞、長崎新聞など多くの反響がありました。森発言の余波の中で迎えた３・８国際女性デーを多くのメディアが報道し、国際的なジェンダー平等の進展と日本の遅れを指摘したのも、これまでにないことでした。

全国各地で「＃わきまえない女」たちの行動が
（２月11日愛媛県で）

没後50年記念企画―様々な取り組みを

こうした中で迎える「らいてう没後50年・『青鞜』創刊１１０周年」。会では「家」オープンを前に、Ｚｏｏｍ会議で企画展示パネルの検討を重ね、６枚のパネルが完成間近です。

コロナ禍で規模や形態（対面かオンラインか）は未定ですが、〝今、らいてうのこころざしを生かそう〟と社会に発信するために、秋には講演会・催しを実施しようと相談中です。

会員の奥村直史氏（らいてうの孫）は、規模は小さくても身近なところでらいてうの映画を観たり話し合ったりする会をもとうと提案、すでに実践され、好評です。ぜひ取り組みましょう。小集会への講師派遣などは事務局にご相談ください。

コロナ禍でも、会と「家」（３面参照）はがんばって活動してきました。２０１６年に突然起こった「家」の前の太陽光発電施設建設問題。事業者からの連絡は途絶えたままですが、「撤回」の意思表示があるまで、会は「反対」を貫きます。

課題は会と「家」の活動の維持・発展

コロナも気候変動も、核戦争の脅威も、国境を越えた世界的な連帯なくして解決しません。そこには女性の力が発揮されねばなりません。今こそらいてうのこころざしを生かすときであり、会と「家」の活動の維持・発展が求められます。理事会は、そのための方策の一環として、会の定款を変更し、役員体制を会長制から代表理事制（１名～５名）へと転換することを総会に提案します。

実りある総会になることを願っています。

第22回通常総会のご案内

日時　２０２１年５月22日（土）13時半開会
会場　東京ウィメンズプラザ　視聴覚室
議題　①20年度事業報告と決算報告
②21年度事業計画（案）と予算（案）
③定款変更について
④新役員選出　⑤その他

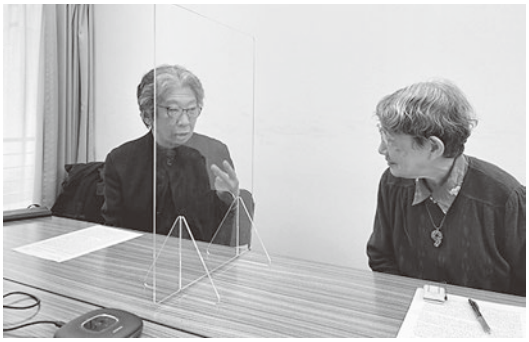
らいてうの家オープン　４月24日（土）
森のめぐみ講座　６月６日（日）７日（月）

家の周りの植生を学ぶ・菅平高原で植栽観察

＊今年のらいてう忌はコロナウイルス感染症の影響で５月には行いません。

＊日程は変更するかもしれません。会のホームページをご覧ください。

オンライン新春トーク



小森陽一さん　米田佐代子さん

「小森陽一・九条の会事務局長が読み解く２０２１年」（たびせん・つなぐ企画）の第２回で、米田佐代子会長との対談がネットで有料配信されました。その一部を紹介します。

……

小森　２０２１年５月はらいてう没後50年。そして、『青鞜』創刊１１０年という節目の年。米田さんがらいてうさんのことをどう考えていたかをお聞きしたいと思います。

１９７１年５月、竹早高校の紛争が収束した時、家に帰ると母（詩人の小森香子）が「らいてうさんが死んじゃった」と大泣きしていたんです。その母親から戦後の日本の女性運動にとってらいてうさんの果たしてきた役割を聞いていました。そして、１９７２年北大に入り、生協で米田佐代子『近代日本女性史』上下（新日本出版社）をみつけて仲間と読みました。女性史というジャンルがあることを初めて知り、歴史を女性側から見直すとこんなに違うのかと思ったんです。性差のかたよりがあると話し合った。だから米田さんはジェンダー認識開眼の先生なんです。

米田　いや、小森さんこそ夏目漱石はらいてうが気になってしょうがなかったことを教えてくださった先生です。私は２００６年にらいてうの家をオープンしてから一時は毎週のように通い、熱中していますが、じつは生前会ったことはなく、１９７１年に亡くなったときも雲の上の人でした。私がらいてう研究を始めたのはその後です。大学で歴史を専攻して１９５０年代に卒業論文を書いたときは、らいてうのような「上流階級の女性」ではなく女性労働者の歴史を書こうと、明治19年に山梨県の甲府の製糸工場で工女たちがやったストライキを調べたのです。

小森　そのことはとりあげられていなかった？

米田　いえ、とりあげられていましたが、これは労働者のストライキではなく、工女たちが雇主に感情的に反発しただけだというような意見があって、紡績・製糸工場などの若い娘たちは労働者として未成熟なため、日本の労働運動の成長は遅かったといわれました。井上清さんの『日本女性史』という本は戦後女性史の草分けですが、そこでも重工業で働く男性労働者が労働運動の先頭に立ち、軽工業で働く女性たちはそれについていったと書いてありました。女は男の後についていくだけなのかとコチンときたんですね。

小森　井上清のような進歩的な歴史学者でも、労働運動における女性の役割を理解していなかった、それに反発したわけですね。

米田　そこでなんとマルクスの『資本論』やレーニンの『国家と革命』などを初めて読みました。

小森　それは、50年代ですね。その頃は労働運動はかなり厳しく、そこに関わっていた私の父は姿は見せないし、母は子育てに苦労した。労働運動をやっていた人達は、世に出られなかった時代だった。その時にマルクス・レーニンを読み直して、女性労働者について卒論を書いたんですね。

米田　でもレーニンを読んだら、いわゆる「ブルジョア民主主義の要求は労働者にとっても重要だ」と書いてあって、らいてうのような市民的な女性たちの運動が担った歴史的意義を明らかにしようと思い、民主主義の問題として女性史に関心を持ったのが、らいてう研究の出発点です。

……

なごやかに始まった対談は約１時間半。米田さんが保育所運動をしていた頃、母となったらいてうが新婦人協会運動をした姿に力を得たということなど、自分の生活史とらいてうへの思いを語りました。そして、晩年入院中のらいてうが「平和の一点で女性団体は団結してほしい。市川房枝さんならできると思う」と言い遺したことが女性運動の新しい方向を生んだことも紹介しています。

（文責・北澤有希子）

たびせんにお申し込みの上、オンラインでぜひお聞きください

らいてうの家　昨年の運営から

コロナウイルス感染禍での学び多い一年でした

らいてうの家は昨年４月25日オープンの予定を６月６日に変更し、例年は地元と東京で行う大掃除も５月２日に地元だけで行いました。オープンまでの期間、閉め切っておくことはできないということで、地元理事が交代で換気を続けました。

５月の連休も開館できない中でしたが、花岡さん、杉山さんと上田市へ会長交代の挨拶に行きました。

上田市の審査を受け、助成金獲得

そんな中、嬉しい知らせが上田市役所から届きました。有り難いことに、入館中止に伴う収入無しの各施設に助成金を支給するとの知らせでした。早速手続きをして申請しました。

市役所から、らいてうの家の調査に職員お二人が来て、審査をしていきましたが、助成金が頂けたのは家の管理がしっかりとしていたからでした。

特に、来館者の状況がノートにしっかりと記されていて、例年の５月、６月は何名の来館者であったか記録されていたことが大事なことでした。また、当番日誌がありましたので、そちらも見てきちんと管理されていることに頷いておられました。

今年の開館を待つらいてうの家

日頃の管理が実を結んだ結果でした。

地元スタッフだけでの運営

６月までは予定したイベントの中止にがっくりしましたが、開館しないで終わってはいけないということで７月開館が決定しました。東京と地元の理事で開館のための展示を６月末に行い、７月前半は例年の当番体制で開館しました。ところが、地元の当番の方の不安が強く、地元当番だけでの開館に切り替えました。日頃、東京の当番さんにお任せしていた事務処理が大変でした。感染予防対策等は当然のことですが、土、日、月と毎日戸締りから会計報告や日誌報告をして帰らなければならなかったことです。

例年は東京の当番にお任せだったＦＡＸ操作が上手くいかず、裏面で送られたり、ついには故障したという事等もあり、事務局長の金輪さんがＰＣＲ検査をして家に出向いたこともありました。上田真田の当番会員さん、大変お世話様でした。その結果と言いましょうか、もう少し新しいタイプのＦＡＸが欲しいということになり、一地元会員の方が寄付すると申し出て下さいました。有り難いことです。この４月には設置されていることと思います。

また、当番予定者が仕事柄町村外に出る時はその都度接触者等報告書を提出する事になり当番をすることが困難になってしまいました。替りを理事の皆さんが交替して乗り切りました。ご苦労様でした。

県外からも来館者が！

来館者はこのような時節柄ないと考えていましたが、７月、８月、９月とこんな時期だから来てみましたとか、県外からご夫婦友達など目的を持って来て下さっていたことを思い出します。

ほとんどの方がインターネットで開館を知ったと言っていました。ネット時代を痛感しました。

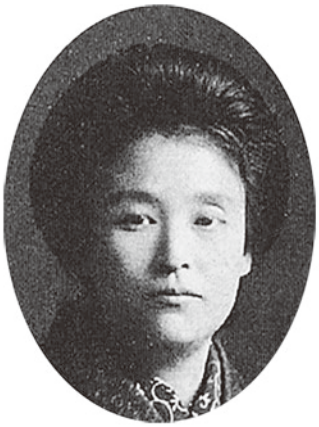
イベントは結局、秋の作業と森のめぐみ講座が行われただけでしたが、実り多い新たな学びの場となりました。

秋のイベントでは、家の庭の植栽について学びました。その時見つけた朝鮮五味子。赤いルビーのような実。カラーでないのが残念

（沓掛美知子）

シリーズ〈新婦人協会の人々〉No.7

小口みち子



小口みち子は、日本美容界の草分け的存在として知られているが、新婦人協会で活動したことはほとんど知られていないのではなかろうか。

みち子は、１８８３（明治16）年に兵庫県で生まれた。教育者であった父寺本武が30代で亡くなり、母ぬいは苦労して５人の子どもを育てた。そのため「女でも自活の道を」という信念を持つようになった。小学校を卒業したのち、独学で教員検定試験に合格して小学校教員となった。

郷里で２年、神戸で３年ほど教師をしたのち、１９０４年上京した。東京でも教師をしながら、雑誌編集の手伝いをしていたが、平民社の社会主義婦人講演会の取材で女性解放思想に共鳴し、堺為子や西川文子らと治安警察法第五条改正運動を行った。一方、相馬御風らの文芸誌『白百合』に「美留藻」という雅号で短歌を発表し、歌人としての評価も高かった。

しかし、当時難病といわれていた「脚気」にかかり、やむなく郷里に帰り療養生活を送った。間もなく健康を回復したみち子は、「美顔術」の話を聞き、将来性のある仕事と確信しその習得のため、１９０７年ふたたび上京した。

日本初の美顔術を行う理容館の遠藤波津子に弟子入りして、約８年間にわたり美容全般や経営実務なども学んだ。私生活では、１９１０年には、美顔術の取材に来て知り合った映画脚本家の小口忠と結婚した。第１子総子は、麻疹にかかり一歳半で亡くなったが、その後第２子静子、第３子達也、第４子正也を儲けた。『よみうり婦人付録』に「共稼する小口みち子」と紹介され「男子と同様一つの仕事を持って稼」ぐのは「むづかしいわざだ」と述べている。

14年には理容館から独立して、芝公園に東京婦人美容法研究会を設立し、美容家の養成を始めた。桃谷順天館の顧問となり「小口みち子女史の美顔講座」という新聞広告や、『主婦之友』、『婦人倶楽部』などの美容相談など多忙な日々が続いた。しかし一方では西川文子らの『真新婦人』や堺利彦の『へちまの花』などにも短歌や小説を発表している。

１９２０年には新婦人協会に参加している。多忙なため目立った運動はしていないが、「政治法律夏期講習会」に参加し、『女性同盟』のアンケート「貴女は選挙権を如何に行使なさいますか」に「女性の力の加わった真の文明を…」と述べている。

関東大震災で芝の家は全焼したが、すぐに美容室を再開、また東京連合婦人会に参加し被災者救援活動を行い、その後の婦選獲得運動にも参加している。また30年の総選挙では無産政党の堺利彦の支持を堂々と表明している。戦中は電力統制のため美容室を閉じ、郷里に疎開した。

１９５５年、婦人参政10周年記念で記念品を贈られ、１９５７年には婦選同窓会から表彰された。１９６７年７月27日、79歳で永眠した。

（折井美耶子）

【事務局日誌】

1月12日　「新春トーク　小森陽一・米田佐代子対談」収録（たびせん・つなぐ主催）
1月14日　第５回理事会
　　コロナ感染症の影響で中止
1月21日　パネル委員会（オンライン）
2月10日　第４回常任理事会（オンライン）
2月18日　パネル委員会（オンライン）
2月27日　パネル委員会（オンライン）
3月9日　パネル委員会（オンライン）
3月11日　第６回理事会（オンライン）

お詫びと訂正

前号第１１２号　４面「母性保護論争と私たちの今」の「山川菊枝」は誤りで正しくは「山川菊栄」でした。お詫びして訂正いたします。

＊「平塚らいてうの生き方を今に学ぶ」

１面で紹介している奥村直史氏による小集会はYouTubeで見ることができます。